

<b>Title</b>	東日本大震災後の保育の場における子どもの変化：関東地区の保育者への実態調査から
<b>Author(s)</b>	金谷, 京子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 25( 1), 2012. 11 : 159-173
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4180">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4180</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈原著論文〉

## 東日本大震災後の保育の場における子どもの変化

——関東地区の保育者への実態調査から——

金 谷 京 子

### 抄 録

---

本研究は震災時の保育における子どものケアや危機管理を考えることを目的とし、3.11の東日本大震災の震源地から約350 km離れた、埼玉県と東京都の保育者に質問紙調査を実施した。調査の内容は、震災後の幼児の行動変化についてと震災時に保育者が困ったことについてである。調査の結果によれば、関東地区の子どもたちにも不安や過敏、退行現象などの心的変化や行動変化が出ていることが分かった。

また、保育者が情報伝達や避難、放射能汚染対応に苦勞した様子が明らかになった。

---

キーワード； 東日本大震災， こころのケア， 災害と子ども， 災害と保育， 危機管理

### 〈序〉

2011年3月11日に起きた東日本大震災直後の東北地方での保育所や学校の被害の状況その他子どもたちの被害の状況については、震災後徐々に活字化されて報告されるようになってきた(野呂：2011、みやぎ教育文化センター：2011、大橋：2011、大森：2011)。本郷(2011)は、震災に遭った宮城県の子どものなかには、震災直後「食事を受けつけず、食べると嘔吐する」「日によって痛みを訴える場所が変わる」、「親の側を離れられない」、「耳をふさぐ」などの身体症状や強い不安行動を示す子どもがいると報告している。

東北ほどではないにしろ、震源地から350 km離れていたにも関わらず、所によっては震度5強の揺れを経験した関東地方の子どもたちも何らかの心理的影響を受け、行動に変化が出ているであろうことは推測できる。そこで、本研究では、埼玉県の保育所と東京都の幼稚園の保育士および教諭に依頼し、震災後の子どもたちの行動変化について実態調査を実施した。本調査の分析から震災時の保育の場における子どもたちのケアの問題と危機管理を考える一助とすることを目的とし研

究を進めた。

## 〈研究方法〉

調査対象：

埼玉県北西部 K 市, S 市, 南部 KG 市。中央部 A 市の保育所の 0 歳クラスから 5 歳児クラスの担任保育士 587 名および東京都内北部に位置する幼稚園の 3 歳児クラスから 5 歳児クラスの教諭 27 名に質問紙調査を実施した。

質問紙内容と調査方法：

- 1) 東日本震災直後の保育所または幼稚園での子どもたちの震災前と比較して、震災の影響によると考えられる行動変化について、18 項目の選択枝から選択する。項目は以下の通りである。本調査項目は、WHO のサイコロジカル・ファーストエイド第 2 版等を参考に作成した。
  1. 揺れに敏感になった (少しの揺れでも反応する、揺さぶりなどを嫌がるなど)
  2. 暗闇を怖がる
  3. 音に敏感になった
  4. 集中力が落ちた。よく聞いていない。長続きしない。
  5. 保育者のそばを離れようとしめない、一人であることを嫌がる
  6. 甘えが強くなったり、わがままを言う。気の強かった子がやたらに素直になる
  7. 一人で出来ていたことをしなくなる (トイレに一人でいかれなくなった、食べさせてもらうなど)
  8. おもらしをする
  9. 昼寝のときになかなか寝付けない。すぐ起きる。怖い夢をみる。
  10. どもる。言葉につまる。
  11. 突然興奮したり、パニック状態になる
  12. 黙り込むこと、表情が少なくボーっとすることが多くなった
  13. 食欲が落ちた
  14. 頭が痛い、吐き気、お腹が痛いなどの身体症状を示すようになった
  15. 指しゃぶりや目をパチパチさせるなどのチック症状のような行動がみられるようになった、または強くなった
  16. 現実がないことを言い出し、それにとらわれる
  17. TV の災害報道で見たことをやたらしゃべる。
  18. ①地震ごっこ、②避難ごっこ、③津波ごっこ、④ ( ) ごっこをする

- 2) 震災後2カ月-3カ月後になっても続いている震災後の行動について自由記述で回答してもらう(K市保育所, KG市保育所, 東京都北部幼稚園が対象)。
- 3) 震災後8-カ月後になってもなお起きている震災後の行動変化について自由記述での回答を依頼(A市保育所, S市保育所が対象)。
- 4) 震災時保育所や幼稚園で困ったことについて自由記述での回答を依頼。

## 〈研究結果〉

- 1) 0から5歳児クラスを対象とした震災直後に震災の影響によると考えられ子どもの行動変化18項目についての回答を年齢別に表記した結果が図-1である。

質問紙回答総数614のうち、最も多く出現しているのが、「地震、避難、津波ごっこ遊び」であった(43.1%:265名)。年齢別にみると、3歳、2歳、4歳、5歳児クラスの順で多く出現している。内容的には、地震ごっこ、避難ごっこ、津波ごっこの順に頻度が高い、2歳児の遊び方は、組織だっただごっこ遊びというほどのものではないが、「地震ですよ! 逃げてください」と言って物を揺らしてみするなど地震時の状況を遊びながら再現している様子がみられている。

津波ごっこに関しては、今回対象となった地域では経験がない自然現象である。したがって、テレビジョンで繰り返し三陸沖の津波の様子や被害を報じているのを子どもも幾度も見てしまっている影響があるとみなされる。

次に出現頻度が高かったのが、揺れに敏感、音に敏感になったという行動変化である。

出現頻度第2位の揺れに関しては、関東地方も東日本大震災後も体を感じる余震が続いていたことが影響しているとみられる。子どものなかには、実際に揺れていなくても「揺れている?」と保育者に話す子どももいる。

第3位の音については、実際に物がガタガタ揺れる音ばかりではなく、風の音や、地震速報のなる携帯の音、所内放送の音などにも敏感になっている。

第4位は、「保育者のそばを離れようとしなない」現象である。

第5位は、「昼寝のときになかなか寝付かない」という問題であった。3.11の発生した時間は、保育所であれば、ちょうど昼寝の最中の出来ごとであった。昼寝の最中に寝巻のまま慌てて外に避難した子どもたちもいる。そのため、その後も昼寝の時にその時の体験のフラッシュバックが起こっている子どもがいる。

第6位は、「震災以前には一人でできていたことが、できなくなった」である。数は少ないものの、5歳児でもそのような行動がみられる子どもがいる。

第7位は、「甘えが強くなる」などの大人への依存度の上昇である。

第8位は、「暗闇を怖がる」反応である。保育所では昼寝の時に暗幕を張って部屋を暗くして昼

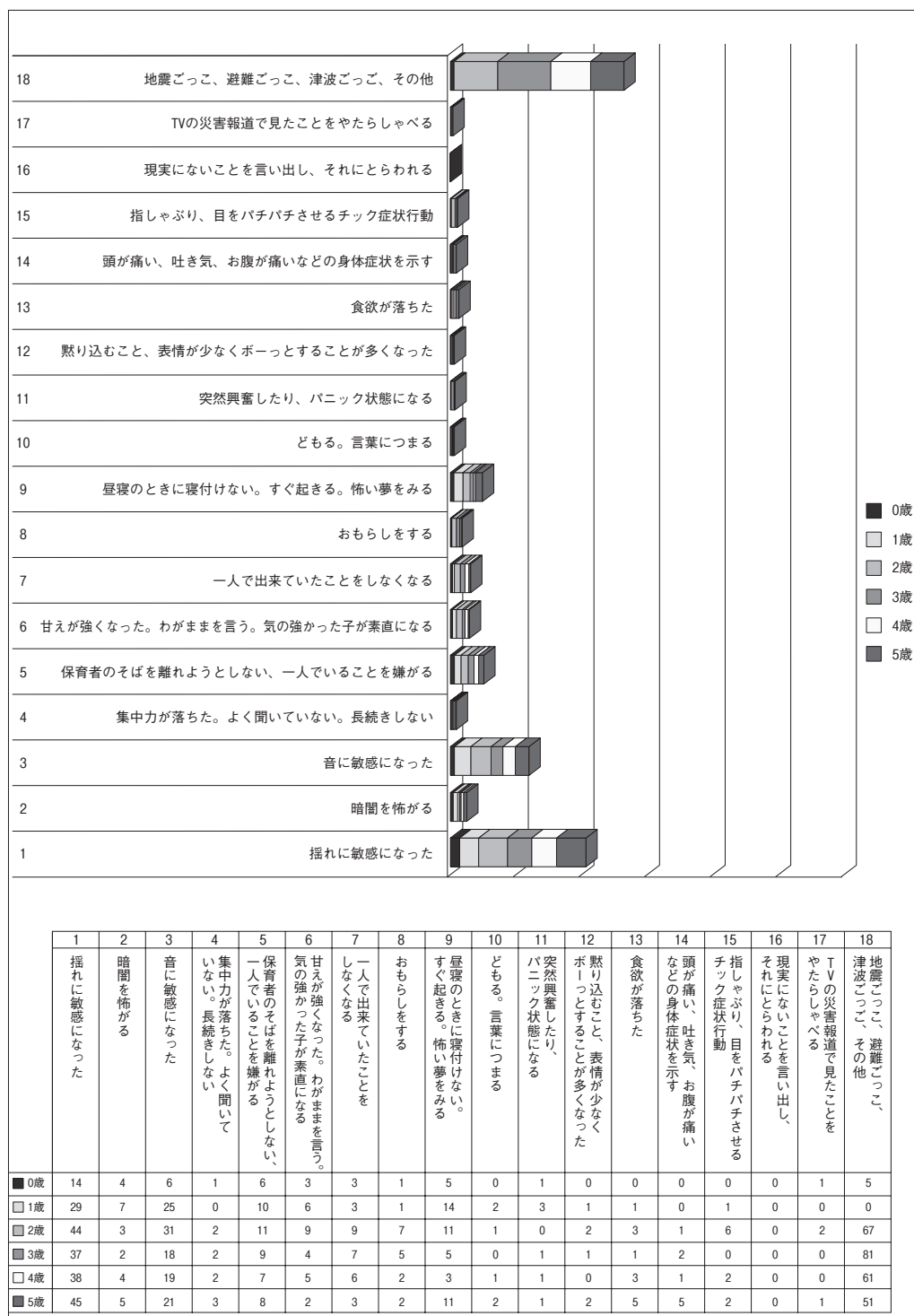


図-1 震災後の年齢別子どもの変化 N=614

寝をするところが多いため、暗いことを嫌がる子どもや、夜の暗い時の余震の体験から保育所でも暗くされると不安を感じる子どもがいるようである。

第9位は、「おもらし」をするようになった子どもである。2歳児、3歳児クラスの子どもの多い。この時期はもともと排泄の自立が未確立の時期であり、外的不安要因があると自立しかかっていたものも退行してしまう可能性がある。数は少ないものの5歳児にもおもらしをするようになった子どもがいることである。

第10位は「食欲が落ちた」との回答である。3歳以上児に多かった。

第11位は、「指しゃぶりや目をパチパチする」などのチック様の症状である。

第12位は、「集中力がなくなった」との回答である。余震の連続、大人の警戒行動など周囲が震災前に比べ落ち着かない状況になっていることが影響していると考えられる。

第13位は、「頭が痛い、お腹が痛い」などの身体症状の出現である。

第13位以下は、実数でみると10人以下の出現であり、出現率としては低い。しかしながら、たとえ一人でも存在したことに留意したい。

第14位は、「突然興奮したり、パニック状態になったりする」行動である。

第15位は、「どもったり、言葉につまったりする」こと、同位で「黙り込む、表情がなくなる、ボーっとする」が出ている。吃音の原因には、心理的不安が影響すると言われている。

第17位は、「テレビの災害報道で見たことをよくしゃべる」である。5歳児に多くみられた。

「現実にはないことを言い出し、それにとられる」については、ゼロ回答であり、出現したところはなかった。

2) 震災後2-3カ月後でも起きている行動について記述した結果をまとめたものが図-2である。

この時期の行動で多いのは、震災直後の調査の際の数より少なくはなっているが、「地震や避難ごっこ」であった。「津波ごっこ」をしている子どももいる。

次に多かったのが、「放送に敏感になった」である。所内の放送音やテレビ、ラジオ等の放送音について敏感ということである。特に、所内の放送は、震災後どこの施設でも回数が増えているので、その影響もあると考えられる。

次に、「地震や津波等の話題の繰り返し」が保育所や幼稚園の生活のなかで出ているとの回答が出ている。震災後2-3カ月後の状況ではテレビ報道も震災の話題が多かった上に、実際に関東地方も余震があり、大人も地震や津波災害の話を多くしている時期であった。

したがって、「地震」の言葉に敏感になる子ども、避難訓練に敏感になる子どももいる。なかには、地震に慣れっこになってしまい、動じない子どもが出てきている。

この時期になり、原発事故の話を放射能の話をする子どもが出てきている。東日本大震災は、地震・津波の被害だけでなく、原発事故の影響により放射能の問題も重なった。特に、震災直後より

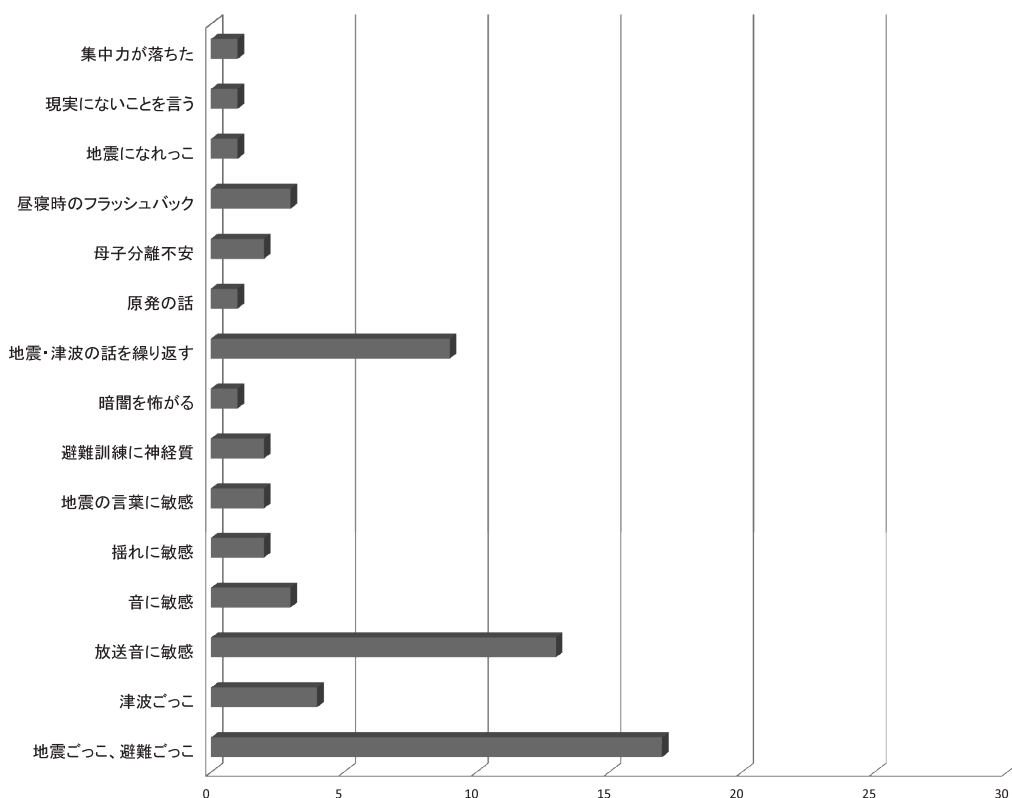


図-2 震災2-3か月の子どもの行動 N=338

も1カ月以上たった時期になり新たな情報が公開されるようになり、大人の不安、ことに幼い子どものいる家庭の保護者の不安を掻き立てることになったため、大人の話の影響が出たと考えられる。

昼寝時のフラッシュバックが起きる子どもは、この時期でもいることに注目したい。また、落ち着きがなくなった子ども、母子分離が難しくなった子どもなど不安要因が行動に出ているケースがあるとみられる。

3) 震災後8-9か月後たっても起きている行動について記述した結果をまとめたものが図-3である。

この時期での最も多く出ている行動は、地震ごっこ、避難訓練ごっこである。津波ごっこの数は少なかったが、この時期になってもしている子どもがいる。

揺れや音への過敏さは、この時期でも消えていない。ことに音に関しては、東日本大震災直後より、少し落ち着いて体制が整ってきてから避難訓練が多くなってきているため、放送音などには注

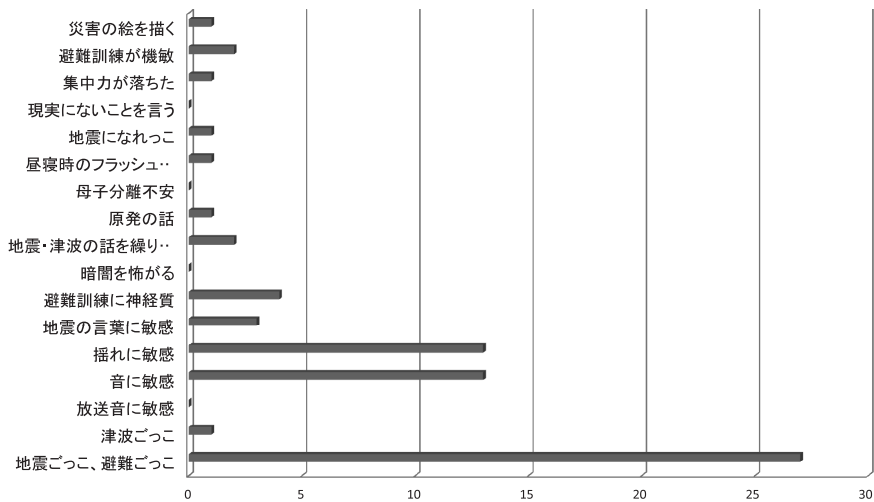


図-3 震災後 8-9 か月後の子どもの行動 N=276

意を払うようになっていていると考えられる。なかには、避難訓練に過敏になり、怖がる子どももいる。逆に、慣れっこになってしまった子ども、避難訓練に機敏に対応できる子どももいた。

この時期になっても災害の絵を描く子ども、昼寝時のフラッシュバックのある子どもがいることも注目したい。

4) 今回の震災に関連して保育所または幼稚園で保育者として困ったことについての記述をまとめたものが表-1である。表の1~5番の項目は保護者に関すること、6~21番は避難に関連する事項、22~29番は震災当日および数日間の環境に関する問題、30~31番は保育者の態度に関する事項、32~44番は子どもの行動に関する事項、45~50番は原発関連の問題、51~52は職員自身の問題である。

保護者との問題で、保育者が最も困ったのは、震災当日固定電話や携帯電話が通じなくなり、保護者との連絡が取りにくくなったことである。地震が発生した時間は保育所では保育中、幼稚園は降園途中または延長保育中であった。そのため保護者の安否確認と引き取りの可否の確認が必要となり、一斉に保護者に連絡を取ったが、連絡が取れないケースが多かった。なかには、保護者自身が帰宅困難者となり、保育所や幼稚園に引き取りに来られたのが、夜中になったケースもあった。その他の保護者の問題では、なかには震災後余震が続く時期であっても危機感のない保護者がいて対応に困ったと言う。

避難に関する事項では、震源地はどこなのか、どこで何が起きているのか情報収集が難しかったとの声があがっている。今回の震災で有効な情報源となった情報媒体にテレビがあるが、各保育室に1台ずつテレビが設置してあるわけでもなく、保育中に保育者自身が情報を入手することに困難



表-1 震災時に保育者として困ったこと (件)

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	合計
保護者との連絡が困難	14	15	19	13	8	11	80
お迎えの遅い子どもへの対応		1	1		1		3
勤務休みの保護者の非協力		1					1
危機感のない保護者				3			3
勤務先を隠したい保護者						1	1
情報収集困難	3			1		1	5
室外に避難すべきかの判断	1	1	5	1		2	10
老朽化した園舎への不安			1			2	3
避難時に子どもが集まれない・じっとしていない	2	1	1	1			5
避難訓練を嫌がる子ども		1		2	1		4
避難訓練に慣れっこになった子ども				1	1	2	4
避難が頻回で落ち着かなくなった子ども						2	2
全員が隠れる場所がない	1		1				2
避難場所の移動・確定の判断			3	1		1	5
全員を避難させる方法	1	1	1	4			7
全員に靴をはかせることの困難	1						1
寝まきからの着替えができなかった	1	2		1			4
昼寝から起こしての避難が難しかった			2		2		4
散歩中の避難が不安	2	1	2	2	2	1	10
園外保育中の電車の運転停止					1		1
手薄の時間帯での対応	2		1	2		2	7
寒さ対応	2	1	1	5	3	1	13
当日停電して困った	1	5	4	9	2	1	22
停電時の子どもの不安への対応		2					2
計画停電で困った	2	1	2		5	3	13
断水で困った			1		1		2
危険物の移動場所		1					1
備蓄不足		1					1
空腹対応					1		1
保育者が厳しくなった						1	1
大人の動揺の影響が出た		1	1				2
不安がる子どもへの対応		1		1	1	1	4
地震・揺れに過敏になった子どもへの対応			2				2
音過敏になった子ども				1			1
警報に恐怖を示す子どもへの対応		1					1

昼寝不安への対応			1				1
体調不良・持病の悪化があった子ども				1		1	2
登園しぶり				1	1		2
障害児への対応						1	1
地震をおもしろがる子ども				1			1
災害報道のまね					2		2
地震ごっこへの対応		1	3	4	1	3	12
津波ごっこへの対応				2	1	2	5
原発ごっこへの対応				1	1		2
放射能汚染への問い合わせ	10	9	13	13	9	7	61
放射能汚染対策のための活動制限	7	9	19	15	4	6	60
汚染物を理解させられない	1				4		5
水の安全性が確認できない	2	1				2	5
職員の通勤手段の確保		1		2		2	5
職員の家族・家の安否		1					1

があった。そのため、室内に留まるべきか、外に避難すべきか判断に迷った保育者も多かった。保育所における低年齢児の避難の問題では、歩いて避難できない子どもたちをどのように避難させるか苦労したケースもある。また、低年齢児の場合は避難の意味が理解できないため、集合できなかったり、昼寝から起きなかったり、靴に履きかえたりができない、避難した先でじっとしてられないなども子どももあり、対応に苦労している。3歳以上児においても昼寝中の地震であったため、寝巻のまま外に避難し、気温が低いなか、寒い思いをした子どもたちがほとんどであった。

環境の問題では、震災当日停電した地域があり、引き取りが遅かった子どもは、暗いなかでの待機になった。また、長時間待機の子どもの空腹を満たすことも課題となった。

原発事故の影響を受け、震災後も関東地方では、計画停電が実施された。保育所・幼稚園ではその対応にも苦労している。

子どもの行動に関しては、不安がる子どもたちへの対応や、揺れや音に過敏になった子どもへの対応が余儀なくされている。また、地震ごっこや津波ごっこ、なかには原発ごっこをする子どもがおり、大人の心情からすると止めてほしい遊びが多くみられ、注意して止めたほうがよいか、見守るほうがよいか保育者は対応に迷ったケースも多い。

今回の大震災の大きな問題の一つは、原発事故による放射能汚染の問題である。関東地方も量は少ないものの放射能が舞い散ったため、住民の不安も大きい。誰もが経験したことのない事故のため、幼稚園や保育所でも正確な情報や知識を持ち合わせていなかった。

幼い子どものいる家庭では、保護者は当然不安になる。保育所や幼稚園にも土壌や水が汚染はさ

れていないか、給食に使用する食品の産地はどこか、安全かなどの問い合わせが殺到し、保育者はその対応にも追われた。子どもたちの室外の遊びも制限し、用心をした。そのため子どもたちも室内遊びの時間が増加し、ストレスを発散しきれずにいたケースも少なくない。

保育所・幼稚園は子どもを預かる場であり、子どもへの対応が第一優先であるが、仕事にあたる職員の安全も確保しなくてはならない。遠方に住む職員の交通手段の確保や、勤務体制の組み替えにも対応に苦労している様子がかがえた。

### 〈考察〉

埼玉県においても3月11日の東日本大震災後も余震が頻発した。1年後でも規模は小さくなったが、余震が起きている。2012年に入ってから、地質研究の結果、関東直下型地震の恐れも報じられるようになってきている。

今回の調査結果から、今後の震災への備えも考慮しながら、今後の課題を1. 子どものこころのケアの問題、2. 避難や環境整備などの危機管理の問題に整理して考えてみたい。

#### 1. こころのケアに関して

震災時は、関東の子どもたちも大きな地震を直接体験しており、その恐怖が記憶に残った者もいる。また、東北地方の津波の凄惨な映像が繰り返し報道されたことで、大人も子どもも尋常でない被害が大震災によってもたらされることを知った。加えて福島第一原発事故の影響で放射能汚染の問題を抱えることとなり、子どものいる家庭の保護者の不安を一層大きくした。

こうした、直接あるいは間接的震災体験から子どもたちの行動にも震災前とは異なる変化が現れたことが今回の調査からもみてとれる。例えば、揺れや音に過敏になった子ども、親や保育者の側を離れようとしなくなった子ども、地震発生時が保育所では昼寝時間であったため、落ち着いて昼寝ができなくなった子ども、指しゃぶりやおもらしなど退行現象とみられる行動をする子ども、頭が痛いお腹が痛いなどの身体症状を示す子どもがいたことである。また、地震ごっこや、避難ごっこ、津波ごっこ、原発ごっこなどのごっこ遊びで直接・間接体験を再現しようとする子どもが多くいたことにも注目したい。

調査対象が同一の保育者でないため、正確な時間経過は追えなかったが、震災2-3カ月後の調査結果では、震災後まもなくの様子を回答してもらった保育者の回答結果と比べ数的には減少しているものの、行動変化は震災後と同じように見られている。震災後8-9カ月後に実施した調査では、音や揺れへの過敏さはこの時期でも比較的多く出現している。この現象は、震災後、少し落ち着いてきてから、避難訓練の回数が増えたことや大きい余震の度に、震災前以上に避難をよくしていることなどから、音や揺れに対する学習が進んでしまったためとも考えられる。8-9か月後の調査で

も、依然として最も多く子どもたちのなかに現れている現象は、ごっこ遊びによる災害の再現である。震災に関する大人の話や、テレビ報道の数も減り、その影響も薄らいでいると考えたいが、子どもたちの間では、震災の出来事は遊び化してしまったようである。ごっこ遊びに対しむやみに禁止はしないほうがよいとよく言われるが、弱いものいじめにつながるような悪質な遊び方については、保育者からの注意が必要である。凄惨な遊びに発展しないよう見守りたい。

このほか、子どもたちが示すさまざまな行動に対し、どのようなケアが考えられるであろうか。ケア・宮崎&プランジャパン（2012）編集の「被災者の心を支えるために」の資料によれば、災害がもたらす心的影響は人それぞれであり、①過去の悲惨な体験の度合い、②周囲の人々からの日常的な支援の有無、③身体的健康、④本人や家族の精神保健の問題、⑤年齢などの要因により異なるとしている。したがって、ケアも一つの原理で決定することはできず、個々人の状態のアセスメントが必要である。

ここでは、一つの参考例として、前出資料から関東地区の子どもたちのケアに役立つであろう、大人ができる子どもへの心のケアについて以下にあげてみる。

（乳児に対して）

- ・暖かくして、安心させる
- ・大きな音や混乱から遠ざける
- ・抱きしめる
- ・できる限り決まった時間に食事し、睡眠をとる
- ・穏やかに話しかける

（幼児や児童に対して）

- ・いつもより時間をかけて相手をする
- ・安全であることを何度も言って聞かせる
- ・悪いことが起きたのはあなたのせいではないと話す
- ・子どもを保護者や兄弟姉妹、大切な人から引き離さない
- ・できるだけいつもどおりの生活時間を守る
- ・何が起きたのかという質問には簡潔に答え、怖い話をこまごまとしない
- ・子どもがおびえたり、まとわりつく場合には、そばに置く
- ・指しゃぶりやおねしょなど、赤ちゃん返りをし始めた場合には見守る
- ・できる限り、遊んだりのんびりすごしたりする機会をつくる

## 2. 災害危機管理に関して

危機には人災のような回避できるものと、自然災害などの回避できないものがあり、回避できないものに対してはリスクを最小限に留める努力をしていく必要がある。保育の場でも二次災害を

引き起こさないよう回避できるものは回避し、できないものはリスクを最小限に抑えていく必要がある。災害対応の観点から以下、考察してみたい。

今回の「災害時に保育者が困ったこと」の調査からみえてきた課題の一つは、情報伝達（連絡）の問題であった。東京および近郊の地区でも電話が使えなくなり、保護者との連絡に混乱が生じた。保育所や幼稚園と役所との連絡もままならなかった。

徳田（2011）によれば、通信手段で危機に弱いものは、音声通話、携帯電話のメール、スマートフォンの一般メールやソーシャルメディアの順となる。また、接続手段としては、危機に弱い順に、光ファイバー接続、高速無線インターネット接続、衛星ブロードバンド接続となる。自治体も個人も災害・停電時にインターネットへの接続手段を持つことが大切であるとしている。メールの一斉配信や災害用衛星電話の設置など、行政がバックアップしながら各施設への設置に向けての整備を推進していくべきであろう。

次に、保育者が困ったことは、避難のタイミングである。揺れの大きさと危険度を感知して保育室から子どもたちを避難させなくてはならない。回答のなかにもあるが、ことに低年齢の子どもたちを避難させるのは容易なことではない。思うように歩けない子どもは、おぶったり、抱えたりして避難させなくてはならない。今回の大震災は、保育所では昼寝時であったので、まず眠っている子どもたちを起こすことが一苦労であったと言う。また、園庭などに避難できても、そこでじっとしてられないのが低年齢の子どもたちである。一人の保育者では対応できないので、複数の保育者でどのような方法でどのタイミングで避難するか、避難場所でどう子どもたちに間を持たせるか、日ごろからシミュレーションをし、実際に訓練しておかなければ緊急時の避難は難しい。

散歩時に災害にあった時の対応も保育者にとっては不安である。慣れない場所で危険物も多く、子どもも拡散しやすい屋外で子どもを危険から守るのは自園での避難に比べ、不安要因が多い。震災以来、遠方への散歩を自粛した園もある。

広瀬（2004）は、「災害を前にしても、多くの人びとが避難しながらないのは、災害に対する正確な認識がもてないためだ。『身におよぶ危険がある』という実感をもつことが避難行動を起こすために欠くことのできない条件である。災害の脅威をしっかりとイメージすることが、被害回避の避難行動を起こすために何よりも重要である」と言う。

保育者はどの場においても、災害の脅威をイメージして、避難行動を起こさなくてはならない。散歩に際は、散歩コースを下見しておき、災害の視点からも危険をチェックしておくことが望ましいと言える。

災害当日の環境について、保育者が困ったことは、停電が起こったことである。3.11の後も原発事故の影響で計画停電が幾度か起きている。保育所での保育時間は長い。その間の停電を想定した準備もあらかじめしておく必要があることが本調査からも示唆された。

3月に起きた震災では、屋外に寝巻のまま避難し、寒さに震えた子どもたちもいた。その後の余

震時避難の際には、上着を持って逃げる、靴下を持って逃げるなどの対策を講じたところもある。また、昼寝をパジャマでなく、Tシャツにして寝るなどの対策をとっているところもある。

このほか保育者が困ったことに、放射能汚染の問題がある。震災後まもなくの間は、放射線測定器も入手しにくく、例えば園庭の砂場が汚染されていないか分からないため、自粛して砂場遊びを止めさせている。散歩も控えた。保護者からの保育所や幼稚園での自粛活動や食品、水の安全性確認の問い合わせが多数寄せられた。日本国民にとって福島原発の事故は未曾有の災害であり、誰もが正確な情報を得にくい状況にあった。そのため行政からの放射能に関する正確な情報の公開も期待できなかった上に、保育者自身も放射能に関する知識をほとんど持ち合わせていなかったため、保護者からの問い合わせへの対応には戸惑いが生じていた。将来どうなるか分からない未知の要素が多い事態に対して、とりあえず考えられるリスクを最小限に留めるために、子どもたちにも活動制限を加える結果になった。その後、行政による出張計測などが実施されるようになり、ところによっては除染を施し、園庭での遊びや散歩の制限は解かれたが、8-9カ月の調査時点ではまだそこまで至っていなかった。目に見えない危険物を子どもに理解させることにも困難が生じ、子どもたちも不可解なまま、活動制限を加えられて生活を送る結果になっている。屋内遊びが増えた分、子どもたちのストレスも増えていたことに注意したい。

今回の地震災害で、津波や建物の全壊という経験は埼玉県や東京都ではない。したがって震度7の震災被害や津波の被害を実体験から想像することはできない。しかし、東日本大震災の映像資料から最悪の事態を想像し、それに対処する方策を考えることは地震に関してはできる。田中(2006)は、リスクマネジメントの観点から、リスク除去のためにリスクの把握、リスクの分析・評価、対策の実行、リスクの再評価が必要であるとしている。今回の地震災害の体験をもとにリスクの評価を保育現場で行ない、対策を立てておくことが求められていると考える。

残念ながら、原発事故に関しては、未知の体験のため、リスクの分析は難しい。放射能汚染に関する正確な情報の入手は保育現場単独で入手することは困難である。公共機関からの正確な情報提供を求めていき、リスク回避の手立てを考えていくことが対策かと思われるが、一つの施設で対策を講じても環境汚染はなくなる。地域での連携が今後の課題となる。

広瀬(2004)は、「防災の目的は災害をなくすことではない。そのようなことは人智をもってしては不可能で、私たちの能力のおよぶところではない。災害の被害を軽減し、人命の損失を少なくして、災害とうまく折りあっていくというのが、防災の第一義的な目的である。もし、私たちが、防災コストをだし惜しみするようなことがあれば、災害とうまくつきあっていくことはできずに、災害に圧倒されることになる。私たちが生き残っていくために、災害を知り、裏をかかれるような失敗をしないことが重要である。まず相手を知ることから始めよう。」と言う。

保育に携わる者は、今回の震災から新たに発見したこと、失敗したことを見逃さず、次の対策へとつなげられるよう、日ごろの備えが必要である。備えとは、子どもが災害の被害に遭わないよう



に、遭ったとしても最小限に抑えられるように物理的環境を整えること、職員による災害時の適切な避難誘導や子どもを不安にさせないための冷静な判断や態度をとれるように訓練をすること、子どもにも安全教育をすることといったソフト面の環境整備である。

現時点では、東日本大震災があまりにも甚大な災害であったために、人々の記憶に新しい。しかし、時間の経過とともに記憶が薄らぎ、災害の際に学習したことを忘れてしまう可能性がある。広瀬(2004)は、「私たちの心的なメカニズムは、不安や危機感を持続させて、つねに心身を緊張状態に置くことの不利益を除くために、時間の経過とともに、自然に、不安や危機感が低下するようにできている。そこで、不安や危機感を、つねに一定レベルに保ち、避難行動を含めた防災行動を起こしやすくするためには、新たな不安や恐怖、危機意識を呼び起こす仕組みをつくらなければならない。」と言う。災害は忘れた頃にやってくるとよく言われるが、人々の危機意識が低下していった時に防災行動が不活化していき、被害が大きくなるためにそのように言われるのではないだろうか。

保育の場は、子どもの命を守らねばならない場である。今回震災時に困った経験やみえてきた子どもの実態を振り返り、子どもを守るために防災行動が今後さらに推進されることを望んで止まない。

謝辞：

埼玉県内保育所職員、東京都北部ブロック幼稚園教諭の皆様にご協力いただいたことを感謝いたします。

#### 参考文献

- アメリカ国立子どもトラウマティックストレス・ネットワーク アメリカ PTSD センター  
[http://www.j-hits.org/psychological/pdf/pfa\\_complete.pdf](http://www.j-hits.org/psychological/pdf/pfa_complete.pdf) 2009
- 大橋雄介『3・11被災地子ども白書』明石書店 2011
- 大森直樹『大震災でわかった学校の大問題』小学館 2011
- ケア・宮城、プランジャパン『被災者の心を支えるために―地域支援活動をする人の心得―』ケア・宮城、プランジャパン資料 2012
- 田中哲郎『保育園における危機予知トレーニング』日本小児医事出版社 2006
- 徳田雄洋『震災と情報―あるとき何が伝わったか―』岩波書店 2011 pp 170
- 野呂アイ『災害における子どもと保育―東北地方の子どもたちの現状』日本保育学会第64回大会「災害時における子どもと保育」報告書 保育学会 2011 pp 45-50
- 広瀬弘忠『人はなぜ逃げおくれるのか―災害の心理学―』集英社 2004
- 本郷一夫『子どもと子どもを取り巻く人々への支援の仕組み―発達128 震災の中で生きる子ども』ミネルヴァ書房 2011 pp 2-9
- みやぎ教育文化研究センター日本臨床教育学会震災調査準備チーム『3・11あの日のこと、あの日からのこと―震災体験から宮城の子ども・学校を語る―』かもがわ出版 2011

# Behavioral Changes in Young Children at Daycare Centers and Kindergartens after the Eastern Japan earthquake

— A fact-finding survey of childminders in the Kanto District —

Kyoko KANAYA

## Abstract

---

In this study, the author investigated behavioral changes in care and crisis control at childcare centers at the time of the earthquake (March 11, 2011).

To prepare for writing this paper, the author gave a questionnaire to caregivers in Saitama Prefecture and Tokyo, about 350 kilometers from the epicenter.

The survey was concerned with behavioral changes of young children and childminders who were troubled by stress subsequent to the March 11<sup>th</sup> earthquake.

The results of this investigation reveal that children of the Kanto District experienced both mental and physical changes which led to uneasiness, hypersensitivity, and regressive behavior.

Moreover, it became clear that childminders experienced problems with communication, finding shelter, and radioactive contamination.

---

**Key words;** Eastern Japan state earthquake, Care of the mind, A disaster and child, A disaster and childcare, Crisis control